

## 霊障の問題への取り組みと課題

— 地方教化研究会から見た宗団の問題点と課題 —

岡野 忠 正

地方教化研究会は、昭和六十三年度から平成二年度までの三年間に七回開催されてきた。その目的は、教化活動の現場で起こっている事例を教師自身が検討することによって、教師・寺院・宗団などの問題点が明らかになり、そこから、これからの教化推進の課題を明確にしようとするものであった。その具体的展開の一つとして第一分科会のテーマに「霊障に関わる問題」を取り上げた。このテーマの設定理由は①檀信徒からの菩提寺に寄せられる霊障に関する相談が増大してきている②霊障の不安を利用した霊感商法が問題化し、センセーショナルな報道がされていること③身近な問題で、参加者が実際のな場面での悩みや考え方に基づいて討論できるなどであった。

七回の研究会の討論の中で、多くの具体的な事例や意見が交換されたのだが、これらの全体を振り返ってみると、一つの疑問が残る。それは、教師の解答のバラツキや姿勢の違いなどの基盤の不明瞭さである。相談者への対処の事例は多く述べられたし、霊の存在の有無といった霊障への対応の根拠となる思想的な場面についての意見も出された。しかし、霊についての考え方にしても、相談者への対応や日常的な活動の姿勢にしても、地方の特性を除いた基本的な部分での共通した考え方が見えてこない。これはどうも個々の教師の在り方の問題というよりは、教師を育成

している宗団の姿勢や在り方に問題がありそうである。

そこで、小論では地方教化研究会で報告された事例や討論を元に、霊障の問題の現状から教師・寺院の問題を考察し、宗団の問題点と課題を考えてみようと思う。

### 1、本宗寺院における霊障の問題の現状

本宗の教化活動の現場（寺院）には、どんな霊障の問題が持ち込まれているのか。それに対して、教師はどのような対応をしているのか。霊障の問題の周辺ではどんなことが問題になっているのか。地方教化研究会での事例報告から、問題の現状を整理しておこうと思う。

#### (1) 霊障の実際

地方教化研究会で報告された事例の幾つかを挙げてみる。

##### 《事例1》相談者―七十三才の老夫婦

妻が四十才代から病気がちで悩んでいる。少し体調が悪いと病院へ行くのだが、思わしくない。精密検査をしても良かったが、異状無しとのこと。先日、易者に占ってもらったら先祖供養が足りないと言われた。事情があつて二軒分の仏壇と墓をお守りしているのだが、それもいけないと言われた。

##### 《事例2》相談者―檀家の嫁

最近、炊事の支度や布団を敷くことも出来ないほど全身の力が抜けてしまう。オガミ屋さんで占ってもらったら水子霊の障りとのことなので、供養して欲しい。

《事例3》相談者―檀家の母娘

二日前の晩から、娘の口調や音声が亡祖父のようになり、居合わせた人に供養して欲しいと訴え、その後は口からヨダレを垂らしながら、猫のように爪を立てて柱をガリガリと引つ掻く。先祖供養とご祈禱をして欲しい。

以上のような事例報告での霊障の実際について概略的にまとめると、次の四点になる。

(イ) 先祖霊・不成仏霊

家族の病気や不幸の原因は、①先祖の中に成仏していない霊がある②昔その場所で不幸な死に方をした人の霊が、供養を求めている③子孫の供養が足りないので、先祖が指導的に供養を求めているとするものなど。

(ロ) 水子の霊

女性や子供の病気やケガや不幸が、④過去に中絶した水子の祟り⑤先祖の中の水子の霊の祟りによるとするものなど。

(ハ) 動物霊

原因不明の病気や精神病、不幸の原因を⑥過去に動物を虐待したためとするもの⑦先祖が殺生を重ねたためとするもの⑧「こっくりさん」等と呼んだ動物霊が取り憑いたとするものなど。

(ニ) 俗信あるいは民族的なもの

⑨墓相や家相が悪いため、家庭に不幸が耐えないとするもの⑩仏壇や墓地を二家分以上祀ると祟りがあるとするものなど⑪西洋的なオカルト現象が起こるなど。

(2) 教師が考えている問題点

事例報告に基づく討論の中で、教師が問題点として挙げたことを整理してみる。

イ、拝み屋・占い師、霊能者の存在

①現在の不幸な出来事や不可思議な現象の原因を、霊的現象あるいは霊障の実際として説明する。

②霊障に悩む人間は、これら霊との介在者のことばに盲目的随従をする。

③問題解決のために、菩提寺などの寺院での祈禱や回向供養を薦める者と、自ら行う者との二者がある。

④一部の地方では、土着した霊能者（イタコ、ワカなど）と寺院とが、伝統的に連携している場合もある。

ロ、霊障の種類の多様性

原因不明の病・不治の病、ノイローゼ、不慮の事故、急死、家庭内暴力（登校拒否）、事業不振、火事など。  
ハ、先祖霊の悪霊化

不幸の原因が先祖霊であると指摘されると、守護者が一転して畏怖の対象になってしまう。

ニ、過去への追求

不幸の原因を常に過去に求めて、現在の自分の在り方（生活・信仰）を顧みない。

ホ、宗団の姿勢、対応マニュアル

霊障の問題について、宗団から意志表明がなされない、また対応のマニュアルが無い。

(3)教師の対応

では霊障の相談に教師はどのように対応しているのであろうか。

①霊についての立場

◇否定的な立場

霊などは存在せず、霊障はあり得ないとする。

◇肯定的な立場

霊の作用（実体化、超常現象など）の体験がある。霊は存在し、障りや祟りがあるとする。

◇暫定的、追隨的肯定の立場

相談者は霊の存在を信じているから、頭ごなしに否定できない。法事（先祖供養）は、霊の存在を前提として行われてきているのだから、否定するわけにはいかない。

②具体的な対応

◇依頼された祈禱や回向供養をする。一緒に経（勤行式など）を読誦するように薦める。

◇相談者の話をじっくりと聞く。日常生活や家族の問題点、精神的な問題点を把握する。

◇相談者自身でできる修行（經典読誦・写経・巡拝など）への展開、指導。

(4)問題の周辺

現在、霊障を起点とする様々な問題が起こっている。ここでは研究会で話題となった問題を列挙する。

①霊感商法

一部の新宗教団体や霊能者は、先祖霊のたたりからの回避（除霊）や招福を名目に、壺や仏塔・仏像を法外な値段で売り付けている。効験がなかったと言うと、再度の購入を強要する。

②悪質な拝み屋、ミニ宗教の台頭

真言宗系の霊能者を名乗る拝み屋が、霊障の相談会を各地で開催し、安価な相談料を宣伝するが、霊障を解決する修法のためと称して高額な布施を要求する。また、霊感（観）を専門としていた霊能者が除霊・招福の霊験を現すこ

とによって教祖となり、霊障信仰に基づく新宗教・新々宗教の教団を形成してきている。

ここでの最大の問題点は、本宗団の檀信徒とその家族が、これらの新興教団の信者として取り込まれていることである。

③悪質業者との結託

拝み屋や占い師が、特定の業者（石材店、工務店など）と結託し、墓石の造立・取り替え、家屋の増改築などをさせる。業者自身が霊障を営業手段にする場合もある。

2、なぜ霊が問題となるのか

霊障とは、現在の家族の病気や災難などの人生・生活の諸問題が、過去からの悪なる影響力（悪霊）によるものと断じ、何らかの形で霊を浄化することによって、悩みや不幸から開放されたいとする現象である。では、なぜ霊が問題となるのか。このことを人間の内面的問題の表象として、なぜ霊が必要なのかという観点から捉え直してみようと思う。

(1)今日の霊魂観について

霊には、大きく分けて二種の捉え方が行われている。その一は神や仏の実体として、あるいは神仏の守護や自然の不可思議な作用といった超越的な存在からの人間への働きかけの主体としての「霊」である。その二は生物（特に人間）の生命活動や精神活動の主体であり、死後も存続するものと考えられている「霊魂」である。しかし今日的に

は、霊と霊魂とは、ほとんど同義語とし扱われているようである。

現代の霊魂観について、吉田宏哲師は『密教の霊魂観』（季刊『仏教』16号）の中で、①霊魂とは特定の個人あるいは自然物等の見えない実体で②この実体は自他の人間や組織に対して有害あるいは有益な作用をなし③この実体を見たり話しかけたりすることができ、あるいはその作用を止めさせたり働かせたりできるのは、やはり特定の能力をもった人や物である、と述べている。

この霊魂観の特徴として、中野東禅師は（『霊と死に仏教はどう答えるか』中外日報、平成二年一月十一日）、

①死者は恐怖で、たたるという感情

②時間をかけて供養すれば浄化するという点

③祖霊は恩恵を与えるという点

④悪霊がたたるというのは、人間の悪に報復するという観念

を挙げ、人間と霊魂との関係を「（霊魂は）たたりという形で人間界を支配し、人間は供養という形で霊界を操作し、その結果、霊は人間に恩恵を与えるという形で人間を支配しているという構造である」としている。

つまり（イ）不可視と存在感の矛盾、各種の名称（霊・魂・霊魂・みたまなど）と意味合いの混同（ロ）人間の禍福への関与・影響力をもった存在（ハ）特殊能力者による可視や交流への信頼感（ニ）生者の世界と死者の世界とが別個に存在しながらも、相互に影響力を持つ交感性を有していると考えられていることなどが、現代人の霊魂観を形成している要素である。

## (2) 恐怖心と霊魂観の連動

中野師は、霊魂がたたるという観念は「人間のあり方、とくに恐怖心や欲望と連動している」（前出『霊と死に仏教はどう答えるか』）として、その経過を述べておられる。その内容を図式化すると、

① 現実の不都合や不安・不幸の発生 ↓ 理由づけ、解決策への関心集中

② 自己の罪と負い目（墮胎や家族の人間関係）の想起、イエや血族の不幸に対するしがらみ感

③ 霊のたたりという「見えない実体の作用」への転嫁

ということになる。つまり霊（靈魂）の存在は、恐怖心からの解放、あるいは過去の反社会的・反道徳的行為の罪責感からの逃避のために、必要とされるものようである。

### (3) 自己存在の背景、生の確認としての霊

日本人の価値観の変動は、意識調査によると一九七七（昭和五二）年前後において顕著であるといわれる。多様化し混乱する価値観の中では、人生の目的を定める規範も目標も曖昧であり、自己の存在を確定する要素も基準もつかみようがない。タテマエが攻撃されホンネが露出した社会では、神秘的存在がむしろ自己存在確認の有効な手段となる。その一つが「霊」である。なぜなら未だに霊の存否についての科学的証明がなされていないからである。科学的合理性が現代社会の中核であれば、これほど身近かで反社会的な存在はない。そして霊は（常識的な）靈魂観によって極めて強く死、あるいは死者と結び付けられている。このときの死は靈魂という人格と実体をもった永遠の生に転化する通過点でなければならない。霊と霊界の存在は、現世の悩みと混乱の理由づけと解放の手段として極めて有効なのである。そして（常識的な）靈魂観では、死に際の願いは（靈魂となった）死後に達成される。現世での恨みも存在の永続も思うがまま、靈魂は万能なのである。現世での自己と社会に対する不満や欲望は、すべて靈魂が解決し



てくれることになる。(『まじめ』の崩壊) 千石 保著 サイマル出版会等参照)

青少年が魅かれる高(異)次元世界の存在である神霊やUFO、自己の霊の高まりとされる超能力・気功など、また少女たちに流行る前世観(自分はハルマゲドンの戦士etc.)などは、コンプレックスに裏打ちされた別の自己への憧憬であり、自己逃避の有効な手段である。彼らの多くは、受験に失敗した浪人生や良くも悪くもない普通の少女である。パフォーマンスが重視される青少年の社会では、マジメやフツウは何の価値も持たない(因に少女の語る前世の姿は、戦士や王女であって、けして庶民は出てこない)。霊の力によって成される自己の特殊化は、他者との差別化(自己確認)にとっての悦楽的手段である。(『別冊宝島』一一四号等参照)

#### (4) 仏教と霊魂観

現代において「死」と「死後」に大きく関わっているのが、ほかならぬ仏教である。それは同時に現代(日本)人の霊魂観との関わりを意味する。しかしその関わり方が、仏教的な生き方の問題に展開しているとは言えまい。過去にもいま現在においても、如何にも霊魂という実体が存在するが如き観念によって、廻向供養の必然性が説かれてきているのである。なぜなら、輪廻転生が業論的戒めの教材(地獄絵図など)として倫理観、道徳観に関与しながらも、結局死後への恐怖心のみが残って、肝心の人生の問題を克服していくための生き方としては、理解されてこなかったからである。仏教は日本に輸入され受容される中で、仏教的理念と日本人の現実(民俗的霊魂観)との矛盾を抱えてきた。黄泉の国は浄土に置き換えられ、怨霊を鎮める儀式は僧侶の役目になってしまった。仏教は日本人の倫理観や人生観に大きく影響しながらも、死を浄化する呪術的イメージばかりが先行してきている。

### 3、霊障の問題が提起する宗団の課題

霊障の問題によって、我々は何を提起されたのであろうか。そして、それは宗団のどんな問題点と課題を提示しているのであろうか。

#### (1) どんな対応が求められているのか

「霊は存在するんですか」「人間は死んだらどうなるんですか、どこへ行くんですか」と問いかけられた教師は多いと思う。問いかけてくる檀信徒は、仏教の僧侶こそ、このような問題に答え得る存在と考えているのである。勿論、個々の教師が個々の現場において、なにがしかを答えているには違いない。しかし自省的に見てみると、いつの間にか中途半端な教学と民俗習慣との狭間で、没個人的な答えをしていないだろうか。

地方教化研究会の事例報告や討論では、霊障に悩む相談者（檀信徒・その他）の問題点が指摘され、宗団の姿勢への不満も出された。ところが教師自身の対応の問題になると、確固たる自信、あるいは思想に裏付けされた対応の仕方よりも、むしろ漠然とした不安が見え隠れする。それは、誰も教えてくれなかった、何も教わってこなかった「生き方の問題としての仏教」を問われている、自分自身の生き方をこそ問われている場面だからではなからうか。霊障の相談に訪れる檀信徒が、疑問を投げかける檀信徒が、本当に求めているのは、相対している教師自身が死をどう考え、どう乗り越えていこうとしているかを答えて欲しいのである。

(2)なぜ、答えられないのか

なぜ自信をもって答えられないのだろうか。その原因の第一は、教師養成の内容にある。教師養成の場において、本来「生死」という仏教が解決していくべき人生の大問題について、これだけ死だけが膨張しているにも拘わらず、死に関する立場や「死者儀礼」の意味合いについての講義・研修はほとんど行われていない。また引導法の伝授は為されても、葬儀や廻向供養の次第や意味合いは説明されない。「本尊」の教義的解釈は説明されるが、信仰上の本尊の考え方・捉え方は獲得できない(なぜなら教師養成の場において信仰の本質や在り方は語られないから)。多くは中途半端な教学の知識と民俗信仰の狭間で揺れ動くワタシなのである。これでは、生き方の問題としての仏教理念の構築も檀信徒への対応も期待できない。

その第二は、教師養成の目標点にある。現在の教師養成の課程の内実は、宗団の所属寺院において葬儀・法事・伝統行事ができることである。基礎課程としての位置付けであるとしても、仏教観が問われないままに現場に放り出されてはたまらない。

第三は、教師研修の問題がある。現在、教化・事相・詠歌の三講習所が開設されている。また教区講習会も開催されている。これらは継続的な教師研修として、その有効性が期待されている。しかし、その内容が必ずしも教師の仏教観、あるいは生き方の問題を厳しく問うものになっていないと思えない。そのような場には参加したがらないという教師の脆弱さもある。しかし最大の問題は、何割の教師が参加できるかということである。寺院の経済的な理由から兼職せざるを得ない教師の多さは、昭和六十年度の総合調査でも明らかである。したがって、参加者は常に全体教の一〇二割で、経済的に比較的余裕のある寺院の教師が定年退職後の教師の集まりということになる。

(3) 霊障にひるまない教師養成のための課題

霊障の問題に対して気後れすることなく取り組んでいける教師、自分の生き方の問題として檀信徒の不安や悩みに答えられる教師を養成していくための研修の課題について私見を述べる。

(イ) 死に対する立場の表明

死に関する考え方については、これまで教師養成の場面で十全に語られてきたとはいえない。ある意味では、個人の修学と経験にゆだねられてきたと言ってよい。それ故の混乱が、教師にも檀信徒にも起こっている。そこで宗団は、まず真言教学の中の生死の問題についての研究を関係機関に指示し、死の問題に対する立場を表明しておく必要がある。

(ロ) 葬儀と追善回向の再解釈

教化の現場における死と死後の問題は、霊・魂・靈魂と葬儀・追善回向との関係性の決着が求められていることでもある。これは十三仏信仰に基づいた追善回向について、現代的に再解釈していく作業でもある。また葬儀については、事相的な場面から再解釈すべきであろう。葬儀の主体は何か、なぜ戒名を授けるのか、成仏を保証するものは何か。その作業が真言宗の葬儀の特徴を構築し、檀信徒を死者や靈魂との関わりだけの儀礼から解放し得るのではなからうか。それが、結果的には葬儀・追善回向が、霊障の問題を解決していく、教師と檀信徒が共に霊障に立ち向かっていく場となっていくことになろう。

(ハ) 本尊観の再構築

「つくしあい」の理念における本尊観は、大日如来一尊に向けられていた。このことが、個々の寺院の本尊との間に混乱を招いた。それは、個々の教師が自己の本尊観を確立していなかったことに大きな要因があると思う。真言宗の本尊観は如何なるものかを宗団を挙げて再検討し、教師に徹底していくことによって、教師も檀信徒も自分の生き方

の問題をみつめながら菩提寺の本尊と向かい合うことになろう。

(三) 教師の信仰、心の表明と檀信徒の状況把握

これまでの死者を媒体としての生者との関わりという寺檀関係ではなく、生き方・死に方をめぐっての檀信徒と教師の協力関係に目を向けてはどうだろうか。死者儀礼への依存から脱するには、まず教師の生き方の内容が檀信徒に表明されねばならない。そして檀信徒の現況把握の仕方についても検討されるべきである。信仰を深める修行方法についても、模索しておく必要がある。写経や巡拝などの様々な試みは、檀信徒の意識を直接感じ取れるだけでなく、霊障の相談者への適切な助言の背景ともなる。

これらの実現のためには、大学や専修学院において教化活動のための講義・実習に力点をおくことが必要である。

地方教化研究会の全七回の霊障の問題に関する討論に参加してきたことは、現場の教師が抱えている問題の多さ、求められていることの膨大さに対して、宗団は解決し得る何物をも与えていない厳然たる現実である。それは地方教化研究会での議論が、実際的な解答や対応に集中してしまうことに如実に現れている。それは、執行部云々の問題ではなく、一人一人の教師に対しての宗団全体の無関心さである。

以上